

公 示

第103回定期中央大会 (9月14日(金))へ向けて

一斉分会開催中: (9月13日(木)まで)

分会長さんは分会開催日程を決め、執行部に連絡ください。

2012年9月4日

日本原子力研究開発機構労働組合

中央選挙管理委員会 委員長 篠崎 信一

第103回定期大会代議員定数について

日本原子力研究開発機構労働組合同規約第49条、並びに同選挙規則第12条及び第13条に基づき、大会代議員定数を下表のとおり決定したので公示します。大会において十分な討議を行うため、別に中央執行委員会より配布された大会議案に基づき、分会の意見を集約し、大会代議員の選出を行うよう要請します。

(大会日時: 2012年9月14日(金) 13:30~16:30 真崎コミュニティセンター)

連合分会・支部	分会	有権者	代議員
連合1	核サ研	9	1
	東海管理・他地区	13	1
連合2	バックエンド	11	1
	環境・線管・研究室	8	1
	放管第1・第2	7	1
工務技術部分会	工務技術	15	2
研究炉部連合分会	炉利用・炉技術	6	1
	JRR-3	9	1
	JRR-4	5	1
連合3	FCA・炉物理	2	1
	核物理	13	1
	化学	9	1
	先端基礎	18	2
	核融合	3	1
	中性子科学	10	1
安全・NUCEF・NSRR 連合	安工・安試・臨界・NUCEF	5	1
	燃安・ホット試験・NSRR	10	1
高崎支部	高崎支部	17	2
大洗支部	原子炉	34	3
	照射	17	2
	管理	21	2
	HT	17	2
那珂支部	JT60 トカマク	9	1
	那珂・管理	4	1
	JT-60 加熱	7	1
合 計		279	33

第103回定期中央大会

日時: 2012年9月14日(金) 13:30から16:30

場所: 東海村 真崎コミュニティセンター 会議室

議案:

第63期の活動の総括と第64期の運動方針、

第63期財政報告、

第64期財政方針

そのほか



[福島県飯舘村 除染廃棄物の仮置き場: 線量率が非常に高いものもある(岩井)]

原発問題住民運動全国交流集会に参加して

中央執行委員長 岩井 孝

9月1日、2日に福島市で開催された原発問題住民運動全国交流集会に参加してきました。2日午後のシンポジウムのパネラーの一人として、原研労組委員長と指名されて招待されたからです。

〔飯舘村で見たこと、聞いたこと、感じたこと〕

1日目の午後は、飯舘(いいたて)村に行きました。全国から参加した大勢の方々と大型バス4台に分乗して、福島駅前から川俣町を経由して飯舘村に向かいました。飯舘村は事故前の人口は約6000人で、現在でも全村民が避難していますが、老人ホームはそのまま運営されており、いくつかの企業も稼働しています。職員や社員は避難している村外から通勤しています。年間の被ばく線量が50mSvを超えるということで「帰還困難地域」に指定されている長泥地区以外は、日中は誰でも自由に出入りができます。夜間の出入、宿泊は許可されていません。

飯舘村に入ると、バスの同乗者が持参したサーベイメータの数値が上がり始めます。バスの中で2 μ Sv/hを超えたときもありました。民家が点在し、とても広い畑や田んぼが広がる農村地帯でした。畑や田んぼが想像していたほどは草ぼうぼうではないのが不思議でした。標高のそれほど高くない山が幾重にも取り囲んでおり、村全体の面積の75%になります。どの家もしっかりと戸が閉じられており、人がいる気配がありません。行きかうのは、パトカーと、村民で組織された「見守り隊」、数台の自家用車くらいです。見た目には、家人が出かけてちょっと留守にしているだけのようですが、どの家にも人がいないのです。これが、放射能による被害のおそろしさだと実感しました。

役場やすぐそばの老人ホームなどがある一帯は除染したそうです。それでも、役場の前に設置されたモニタリングポストは、0.7 μ Sv/hを指示していました。玄関先では1.1 μ Sv/hでした。除染で除去した土砂などが大きな土のうに入れて、置かれていました。その中には、表面で30 μ Sv/hを超えるものもありました。

村会議員の方は「事故の後、自分たちの村が放射能で汚されていることも知らずに、原発の近くから避難してきた人たちを1600人も受け入れた。避難してきた人たちに汚染した水や食べ物を差し上げたことを知り後悔した。事故の前は、6000人の人口、1700世帯であったが、今は3050世帯にも増えた。一緒に住んでいた家族がばらばらにされた結果だ。この事故のせいで、避難、除染、仮置き場、帰村、賠償、などでいろいろと意見の違いが生まれ、村民の中に分断と対立が持ち込まれた。除染が進まない。除染しても若い人は戻って来ないかもしれない」と話されていました。

帰路につく時、トラクターで畑を耕している人、あぜ道の草を刈り払い機で刈っている人を見つけました。農家の方は、ここで農業を再開することを願って、定期的にこうして手入れをしているから「草ぼうぼう」ではないのだと気が付きました。

短い時間の見学でしたが、避難地域を実際に見ることで、「原発事故が起きれば、このようにして暮らしも地域のコミュニティも生業も奪い、家族がばらばらになり、不安の中でずっと生きていくことになる」ということを、より強く感じました。これからの福島の復興、原子力を考えるためには、誰もが、このことを実感する必要があると思います。

〔交流集会〕

2日は交流集会でしたが、全国26都道府県から350名を超える参加者で、会場はあふれるほどでした。

午前中は、福島市で子育てしているお母さん、飯舘村の菅野村長、主催者の話がありました。最初の方は「避難することも避難しないでここで暮らすことも、どちらも自由に選択でき、安心して暮らせるようにしてほしい。県外などから、たとえ善意でも「こどもだけでも避難させなさい」と言われるのは、親(特に母親)たちを多いに悩ませ、自分をせめることにつながっている。ここで暮らすことを選んだ以上、こどものためにつながるすべてについて、できることは何でもやろうとしている」という趣旨の話がされました。私たちは、この気持ちにどれだけ寄り添えるのかと自問しました。

午後のシンポジウムでは、パネラー4人がひとまわり話をした後、全国の運動の報告が続きました。パネラーの持ち時間は短かったので、私は、事故後いろいろなところで正直に話をして住民の方に判断材料を提供してきたことと、原研労組が4月18日に「拙速な原発運転再開に反対する」声明を公表するまでの経緯と声明の内容を紹介しました。「私たちは原子カムラにいるからこそ、声をあげないといけないと考えている」ということを強調しました。そして、最近気になっていることを話して締めくくりました。それは原子力規制委員会人事案への批判に見られるような、「原子カムラの住民はみんな悪者」と言わんばかりの論調はおかしいのではないかということです。本当に反省し責任を取るべきは、事故調査委員会報告で「福島原発事故は人災」と指摘されたような状態で日本の原子力の進め方を決める立場にいる(いた)人たちです。「みんな悪者」論は、その人たちを隠すことになる。福島原発事故への対応も、これからの原子力安全規制も、これからの原子力を考えることも、原子カムラの専門家をすべて排除することでは成り立たない、ということです。会場からの発言で、京都大学原子炉実験所で働いていた方が「岩井さんの話を補強したい。自由に意見が言える職場でなければならないと思い、自分も労働組合運動をしてきた。それがとても大切なことだ」とフォローしてくれました。